

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2116 号

The Prognostic Impact of Differentiation at the Invasive Front of Biliary Tract Cancer

(胆道癌における腫瘍浸潤先進部の分化度は予後因子である)

大久保 悟志 (おおくぼ さとし)

博士 (医学)

論文内容の要旨

原発巣の先進部の評価は多くの癌腫において予後因子として有用であると報告されているが、胆道癌では十分に検討されていない。そこで我々は、原発巣における浸潤先進部の分化度および簇出といった形態学的評価を含めた臨床病理学的因子の予後因子解析を行った。対象は、国立がん研究センター東病院で 2000 年～2012 年の間に胆道癌根治切除を受けた患者とした。組織形態学的検討は、腫瘍を含む切除検体のパラフィン包埋切片から作製されたヘマトキシリン・エオジン染色標本を用いて行った。浸潤先進部は、原発巣で最も深達度の深い浸潤部と定義して形態像を検討した。臨床データは診療録を後方視的に調査して収集し、手術日からの全生存期間を記録した。予後因子解析は、単変量解析で有意であった因子を Cox 比例ハザードモデルに投入して多変量解析を行った。解析対象患者数は 299 名で、年齢中央値 68 才、男性 67%、肝外胆管癌 48%、胆嚢癌 17%、乳頭部癌 19%、肝内胆管癌 16%であった。腫瘍浸潤先進部の分化度が低分化であったものは 47%に、簇出が 5 個以上であったものは 10%に認めた。腫瘍の浸潤先進部が低分化であったものは高または中分化であったものと比して簇出、脈管侵襲、リンパ節転移の頻度が多く認められた (簇出: 21% vs. 0%, 脈管侵襲: 71% vs. 50%, リンパ節転移: 52% vs. 36%)。生存期間の中央値は全解析対象患者では 51.5 カ月で、浸潤先進部低分化症例では 31.4 カ月、浸潤先進部高または中分化症例では 108.0 カ月であり、有意に浸潤先進部低分化症例で短かった。全生存期間を用いた予後因子解析では、多変量解析で、浸潤先進部低分化 (HR: 1.71)、簇出が 5 個以上 (HR: 2.14)、脈管侵襲 (HR: 1.56)、リンパ節転移 (HR: 2.59) が独立した予後不良因子として抽出された。無再発生存期間を用いた予後因子解析においても多変量解析で浸潤先進部低分化 (HR: 1.75)、脈管侵襲 (HR: 1.50)、リンパ節転移 (HR: 2.19)、切除断端陽性 (HR: 1.71) が独立した早期再発因子であった。以上の結果より、胆道癌においては浸潤先進部が低分化であることは予後不良因子であることが明らかになった。評価は簡便であり、胆道癌根治切除後の患者のマネージメントに有用であると考えられた。